

大阪経済大学特別招聘教授
経済評論家

岡田 晃

歴史に学ぶ

第二十七回 狩原重秀は元禄景氣を作つた『名奉行』だつた！

延宝検地で頭角を現す

本連載の第十七回（一〇一二年九月号）で、生類憐みの令で悪名高い徳川綱吉について「実は名君だつた!? 知られざる数々の改革」と書いた。その綱吉によって抜擢された荻原重秀も、貨幣改鑄で経済を混乱させたと評判が悪い。だが本当にどうか。良く調べてみると、悪評とは違う実像が見えてきた。

重秀は一六五八年、旗本の家に生まれた。父は、幕府財政を管理する勘定所に勤めていたが、旗本としては最も小身クラス。重秀は十七歳の時、父と同じく勘定所に召し出され、役人生活がスタートした。

勘定所は当時、トップである勘定頭（三四四人による月番制、後に勘定奉行に改称）の下に、勘定組頭、その下に勘定といいう構成で、重秀はその勘定の一人として採用された。

それから数年後、重秀は早くも頭角を現す。幕

府は財政悪化に対応して年貢収入の増加を図るために、畿内を中心に大規模な検地を実施した（延宝検地、一六七七年）。重秀は、先輩の勘定たちとともに十人のチームでこの検地の計画策定と監督を担当した。畿内は豊臣秀吉時代以来、本格的な検地が行われていなかつたため、その間の生産増加を把握し年貢収入に反映させることが最大の任務だつた。だが急激な年貢引き上げは農民を困窮させることになる。しかも洪水などで不作が続いたため、生活安定との両立が必要だつた。

重秀のチームはこうした難しい任務で成果を挙げ、検地終了後に幕府から褒章を受けている。その中でも重秀が最も高く評価されたようで、三年後、二十六歳の最年少で勘定組頭に昇進した。

佐渡金山は、年貢収入と並ぶ幕府財政の主な収入源だつたが、当時の工法では鉱脈がほぼ掘り尽くされ、金の生産が減つていた。しかも地中深く掘り進めるにつれて地下水が湧き出てくる。それを汲み上げるには膨大な人手とコストがかかり、採算が合わなくなつていた。

排水問題の解決がカギと見た重秀は、日本海に通じる沢に接続する大規模排水溝を掘削させた。

完成まで五年、工事費は十萬両余りという大事

貨幣改鑄で幕府財政立て直し △元祖・量的金融緩和とリフレ

一六八〇年、四代将軍・家綱が死去し、綱吉が五代将軍となる。内政改革を進めた綱吉は勘定所

業となつたが、この戦略的な投資によつて効率的な排水が可能となり、生産量が増えた。金の資源枯渏という根本問題はあつたものの、経営は一時持ち直した。

こうして検地と佐渡金山という幕府財政二大収入源の増加策で功績を挙げた重秀だが、さらに抜本策に切り込んでいく。

一六九五年の貨幣改鑄（元禄改鑄）がそれである。ポイントは金の含有率だつた。それまで流通していた慶長小判（二両）は金の含有率が約八四%ときわめて高かつたが、新たに铸造した元禄小判では約五七%に減らした。金の含有率を約三分の一に落としたのだ。それでも両者を等価交換とした。

その結果、改鑄による差益は、銀貨分も含め五百万両余りにのぼつたという。これにより幕府財

重秀の考え方は、現代の貨幣理論を先取りするものだつた。現代の我々は、單なる紙切れの紙幣に千円や一万円という価値を当然のように認めている。これは国という信用の裏付けがあるからだ。だが当時はまだそのような考えはなく、あくまでも金という価値が必要だつた。ところが重秀は「貨幣は国家が造る所、瓦礫がれきを以つてこれに代えるといえども、まさに行うべし」と語つたといふ。このような重秀の政策が元禄の好景気を支えたと言つても過言ではない。

まさに既成概念や常識にとらわれずに時代を先取りし、物事の本質をしつかりと把握して実行していく——延宝検地以来の重秀の一連の政策を見ると、消極的な守りの経営ではなく、佐渡金山のように戦略的な投資を進めつつ、必要な対策を一点点的に実施してきたことがわかる。いわば「選択



政は一時的に好転した。その功績で重秀は勘定奉行に昇進し、同時に二千石に加増された（最終的には三千七百石に）。

元禄改鑄には、もう一つのねらいもあつた。経済発展により貨幣への需要は高まつていて、前述のように金山の生産が減少していたことから、金含有率の高い貨幣の発行には限界が生じていた。そのため、金含有率を下げた貨幣発行によつて市中に流通する貨幣の量を増やしたのだ。今で言う量的金融緩和である。リフレ政策の元祖とも言える。

時代を先取りする積極経営 と評判にとらわれぬ判断が重要

と集中」による積極経営だ。現代の企業経営にとって不可欠の要素である。

ところが重秀の評判はよくない。その理由は、「貨幣の質を落とすことは倫理的に悪だ」との価値観があつたことに加えて、綱吉の次の六代・家宣と七代・家継の側近として活躍した新井白石が、重秀を徹底的に批判したからだ。一方、重秀は自分の政策や主張についてほとんど書き残していない。そのため、白石による悪評がいつの間にか「事実」として定着してしまつたのである。

その結果、現代でも学校の教科書には「重秀の貨幣改鑄がインフレを引き起こした」と書いてある。だが金沢大学教授の村井淳志氏は、貨幣改鑄以後の米価（名目）上昇率は十一年間で約三三%、年平均で三%弱にとどまつており、それも冷夏や地震などが主因だつたことを明らかにした（『勘定奉行荻原重秀の生涯』集英社新書）。つまり貨幣改鑄で経済が混乱したとは言えないのだ。

重秀への悪評は田沼意次に対するそれと共通している。意次もまた、政敵・松平定信によつて悪徳政治家とのレッテルを貼られ、悪評は現代まで残つてゐる。重秀と意次の悪評と実像とのギャップは、イメージや評判にとらわれずに物事を判断することの重要性を示していると言えるのではないだろうか。

岡田 晃（おかだ あきら）

一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇一二年、同特別招聘教授。